

ストーリーとプロースの間で——梶井基次郎「檸檬」研究

陳 蘇 黔*

Between the story and the prose—A study on Kajiimotojiro' s “Lemon”

Soken CHIN (Suqian CHEN)

”Lemon” was the first literary work of Kajiimotojiro, a writer during the end of Taishou and the beginning of Showa period. ”Lemon” has earned much admiration, it is also a text which has allowed various different interpretations from many angles based on various new theories. However, the question of whether this work could be called a short story has never been mentioned. In this paper, I will discuss this classification question, and analyse the narrative structure in order to point out that the issue about this work’s classifying contains a large number of subjects, the problem concerning Kajii’s composing philosophy, the identity of Japanese novel and more.

はじめに

同人誌『青空』創刊号(大正15年1月)の巻頭をかざった「檸檬」^(註1)は近代の青春文学の古典として名高い。「檸檬」は青春の不機嫌とそれを打ち壊す「意識の奇蹟」^(註2)を鮮やかに表現し、発表の当初こそ無名だったが、やがて賛辞が絶えなかった。一方、研究史では方法転換の節目節目に新しい読みが生まれている。近年、「檸檬」を含め梶井基次郎の諸作は作品論や記号論、精神分析^(註3)、現象学の視点からの解説もみられる。よく言われるように梶井基次郎の表現は大正から昭和へ(1920年代)の枠を超え、後世に大きな影響を与えた^(註4)。普遍的ななにかがこの作家の文学に内包されているからこそ研究方法の多様性に対応できたのであろう。「檸檬」への評価もおそらく今後も揺るぎないと思われる。

ところが、「檸檬」は小説であろうか。筆者個人は「檸檬」を小説と呼ぶことに少なからぬ迷いが

ある。これまでの作品研究をみると、小説らしいかどうかの問いがほとんどないまま、表現とコンテツを問題にしたものに研究・評価が集中していたように思われる。ひとつの仮説を立ててみよう。もし「檸檬」が文化的コンテクストを共有しない言語文化圏に置かれたら、その読後感は、とりわけジャンルの分けかたについてはかなり違ってくるのではなかろうか。背景知識の乏しい読者に先の質問を投掛けるなら、短編小説よりも随筆または散文^(註5)と答える人が多くを占めるだろうと予想する。誤解を恐れずにいえば、すぐれた作文<ではないかとする感想すら可能であろう。ある文学テキストがオリジナル版と翻訳版とで異なった印象を与えるのは、ある意味では不思議ではない。とはいえ、作品の大枠であるジャンル分類で、これは作品の性質ともかかわるものだが、はっきりとした見方の違い(或いは最初から問題にしないということ自体)が現れると想定できるのはやはり追究に値する問題ではなかろうか。

いずれにせよ、「檸檬」はいわゆるフィクションに主眼を置く本格的なショート・ストーリーの枠をはみ出しながらも表現の面では多くの人が心酔

* 東京工芸大学工学部基礎・教養非常勤講師
2000年9月26日 受理

するほどの支持を得ているテキストといえる。この落差は一体何であろうか。本稿では、この枠組みの問題が読みに機能してこなかった点を問題意識として提起しつつ、テキストの構造分析を試みる。これによって、作家梶井基次郎の創作理念、その固有の問題を探るアプローチとしたい。

1. きわどい小説

先ほどひとつの仮定をあえて述べたが、その根拠は、そもそも「檸檬」は語り手「私」のある一日の心と感性のドラマを追ったものであり、物語性の薄い内容だけに小説的ではないという読後感を与えやすいことと、語り手の「私」以外登場人物はなく、枚数が短いわりに、ある日の出来事の部分と、「その頃」の「私」に関する一般的な状況の導入部分がほぼ同じ分量などが理由である。特に後者はより強くこの感想を誘発するのではないかと推測できよう。

先に触れたように体裁に関する問題は存在するにもかかわらず、これまでの研究はこの点にほとんど触れずに様々な読みや分析を積み上げてきた。あたかも暗黙の了解があるごときである。もちろん、個々の作品より以前に、梶井基次郎が小説家かどうかという問いは成り立つが、これもまたほとんど議論されることがなかったように思える。一方、これに対して、梶井基次郎が私小説家かどうかという議論は以前からあった。梶井基次郎は短い生涯でわずか20数編の短い作品しか残しておらず、この中、あえて本格小説といえば、「Kの昇天」、「ある崖上の感情」そして生前最後の「のんきな患者」くらいであるが、それでも梶井基次郎は私小説家ではなく、心境小説や私小説の表現を超えた「感性の文学」という評価はもはや定説になって久しい。これは至当な評価であるが、問題はこの議論にみられる問題意識が実は小説かどうかを争点にしておらず、私小説かどうかに焦点があったことである。構造上の小説らしからぬ点を問わないまま「檸檬」が読まれてきた要因のひとつはこの私小説家かどうかの議論の欠けたところにあり、日本独自の小説理念というきわめて大きな問題に突き当たらざるを得ない。

詳細は別の機会に譲るが、草稿の一部を独立させたという「檸檬」の成立の事情も、もう一つの押さえるべき要因である。

きわめて大雑把にいうと、日本での小説の概念は『小説神髓』で坪内逍遙がnovelの訳語として使用したのを最初として、それ以降、＜私小説・私小説論＞というカテゴリーの存在が象徴するように海外とはやや異質な側面を有しつつ今日までいたった経緯がある^(註6)。最近の鈴木登美氏の私小説論を援用すると、私小説の言い方は極めて曖昧な概念で、その中身が何であれ、それを問うことはこれまでの文学史をみてもわかるようにある種の不毛さを伴い、「私小説はこれまでの通説に反し、対象指示上、主題上、形式上の何らかの客観的な特性によって定義できるようなジャンルではない」と指摘し、むしろ「大多数の文学作品がそれによって判定・記述された、ひとつの文学的、イデオロギー的なパラダイム」^(註7)と明快に述べる。また、私小説のネーミングが成立すると同時に、私小説批評の言説が「私小説の集成あるいは規範を遡及的に創造した」^(註8)のであり、つまり、私小説言説(またその批評言説)は私小説か非私小説かを分ける読みのモードとして確立し、長く機能してきた。鈴木氏が語るように、一般的に私小説というと、「大正の中期から後期にかけて現れた、小説家が自分の身に起こった出来事を、虚構を交えず自己表白というか、そのまま記述したとおぼしき散文、しかもそれが小説と呼ばれた物」(注9)であるが、本稿の関心はまさにこの「散文、しかもそれが小説とよばれた」いわば言わなくても自明だというあたりにある。梶井基次郎を読む場合、全集の成立が象徴するように多くの情報がすでに予め定められていた。そこに収められているものは、日記類や習作、草稿、既発表の作品という分類と、形の上で詩か散文の作品という分類であった。詩ではない作品類の細分はされておらず、作品史でもその意識もないままで読まれてきた。これから「檸檬」を中心にこのことを検討してみたい。

2. ストーリーへの志向

どうやら導入で多くの紙面を費やした。「檸檬」の冒頭部分を検討しよう。有名な「えたいの知れない不吉な塊」ではじまる「檸檬」の冒頭は次のとおりである。

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧へつけてゐた。焦燥と云はうか、嫌悪と云はうか——酒を飲んだあとに宿酔があるやうに、酒を毎日飲んでみると宿酔に相当した時期がやつて来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかつた。結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また脊を焼くやうな借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がなくなつた。蓄音機を聴かせて貰ひにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上つてしまひたくなる。何かが私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けてゐた。

不機嫌な青春の日常はこのように切り出された。冒頭だけでも内容からしてこの一人称の「私」はいかにも若者だと読者に了解させることができよう。青年の心が「始終圧へつけ」られている状態にあると冒頭から提示することで十分にインパクトがある。この後、「焦燥」「嫌悪」「宿酔」といったことばが連なり、不吉の塊に圧迫された症状を解説するかのようである。語り手の〈私〉はすぐこうした状態を「いけなかつた」とぼっさり否定し、一方的に「いけない」と自己批判する。しかも自作自演のようになぜ「いけない」のかに答えるふりをして、次々と理由を提示しては否定していくのである。これは技法といえと同時に、語り手の戦術でもあろう。否定されたからといって、事象が消えないばかりか、人物像に必要な情報として逆に鮮やかに浮き出てくる。また、冒頭最後のほうでは美しい音楽や詩でも受け付けられないほど苦しんでいることを強調。そして、意味

ありげに原因の正体不明さを突出させながら、さりげなく「私」が街の遊歩者であることを伝えておく。

たしかに肝心な「不吉な塊」の実体は「字面を追う限り、比喩と否定の連続で」、「作品の中でいまいなまま放置されて、追及はされていない」⁽⁴¹⁰⁾ のであるが、冒頭の一節を読んだ読者は実はかなり明確な「私」像を築くことができる。つまり、不健康の心身(肺結核と神経衰弱)と経済的に苦しい状況、そして、優美な音楽や詩を嗜めるほどの教養を備えていたという「私」の事情から。物質的支えなくしての精神上的富・教養への志向が大正教養主義の真っ只中の時代⁽⁴¹¹⁾ において何をもたらすかは自明のことであり、この苦悩はまた普遍的である。

さて、冒頭で明らかにされた「火の車」のような内面はその後の作品展開の伏線を敷き、冒頭以降は「私」の感性が綴られていく。「見すばらしくて美しいもの」に引きつけられる自分、町を歩きながら「そこが京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎」にいるような錯覚を楽しむ自分、色とりどりの素朴な花火の束、おはじきや南京玉といった小物に魅惑を感じる自分、そういう美意識が次々と打ち明けられていく。そして、注意深く「丸善」という場所を導入した。そこは西洋趣味の小物をウィンドウショッピングし、「二銭や三銭のもの——と云つて贅沢な」とりあえず自分を満足させる上等な鉛筆を手にする場所であった。そして、「丸善」はまた作品内現在の「私」にとって「借金取の亡霊」という意味深長な場でもあった。作品はここで転換点を迎え、ここから後半はいよいよ一個のレモンとの出会いを描き、高く積み上げた画集に置くレモンを爆弾と見立てるといふ奇妙な幻想の城を築き上げ、作品を締めくくる。

変にくすぐつたい気持が街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだつたらどんなに面白いだら

う。

私はこの想像を熱心に追求した。「さうしたらあの気詰りな丸善も粉葉みじんだらう」
そして私は活動写真の看板画が奇体な趣で街を彩つてゐる京極を下つて行つた。

街の遊歩者として登場した「私」は最後まで街を歩く青年であった。この意味でもこの作品は首尾一貫であり、全体的に言えば最後のクライマックスに向かって収斂していく構成である。レモンをめぐるある日のことを明らかにするまで、「私」の感覚することについての表白はかなりの分量があるが、また、この部分自体も魅力に富んだものであり、簡単に前半対後半のように価値を比べられない。が、作者には明らかに最後の出来事を(それは内面のドラマにほかならないが)作品の展開の動機としている志向がある。

ここでドッペルゲンガーをモチーフとした「Kの昇天——或いはKの溺死」の構成上の類似をみたい。この作品はある人への返信の形をとり、しかもミステリー仕立てのいわば本格小説に近い作品である。やはり冒頭から気がかりとなる事柄、手紙の動機と理由と課題などを引用や質問の形で提示し、話の枠組と要件をはじめから明らかにするという戦略、そして、語り手が自ら原因究明の課題をあげながら、巧みにその可能性を否定し多くの空白を残した筋の組み方である。また、語りの構造も末尾の「昇天」という幻想的な場面の描写に向かって収斂されていく^(註12)という特徴があり、「檸檬」の構成と実に相似ているのである。

「檸檬」は梶井基次郎が多くの習作を試みた後、初めて世に出した作品である。この作品は作者の代表作だけでなく、習作との比較によって、「檸檬」に行き着いた作者の創作方法を検討する上で避けて通れないものとみられてきた。「檸檬」と「Kの昇天——或いはKの溺死」との間に作風の違う「城のある町にて」が発表されているが、「檸檬」から「Kの昇天——或いはKの溺死」への繋がり、実はこれまで述べてきたようにストーリーへの志向ではなかったのであろうか。

3. 「その頃」／「その日」

しかしながら、時間という角度からみれば、「檸檬」は違った一面がみえてくる。それはある長さをもった一定の期間における主人公の生活と心の状況を説明した部分と、ある日の体験を書いた部分とが、だいたい同じ分量で混合されていることである。特定の継起的な出来事をつづるのが、小説の常識とすれば、このことはかなりはみ出ている特徴といえる。一定の期間内での出来事や心的状況を混合した時間を集合的時間とよぶならば、多くの小説では、集合的時間がはさまれるにしても、それはあくまで補足的なものにすぎず、物語の中心部分に匹敵するような分量はない。

作品の中で「以前」、「その頃」と「その日」といった時間の単位の名詞が頻繁に出てくる。冒頭からもわかるように、この作品の語り手は基本的に過去のある時期の自分を回顧する位相にたつ。「不吉な塊」に圧迫される「宿酔に相当した時期」を作品内現在とすれば、「以前」は<現在>より前のしかも不特定の時期、「その頃」は主に<現在>をさすやや幅をもった時期で、どちらも曖昧な時間表現である。「檸檬」の「私」の感性は「以前」と「その頃」を軸として語られている。「以前」の「私」と「その頃」の「私」との差異が執ようなほど対照的に描かれている。例えば「生活はまだ蝕まれてゐなかつた以前私の好きであつた所は、例えば丸善であつた。(中略)私はそんなものを見るのに小一時間も費やすことがあつた。(中略)しかしここももうその頃の私にとつては重苦しい場所に過ぎなかつた」という具合である。「以前」との対比で「その頃」の主人公の心情や感性はある意味では読み手に納得させる効果がある。言い換えれば、全体的に見て、これはレモンを手にしたある一日のドラマの心理基盤であり、かなり長い導入であつたという意味で、「その頃」が導く「私」の感性の描写自体が終着点への大きな伏線といえる。この紙面の大半を占める「その頃」の感性の叙述は魅力的要素を多分に含み、この部分を作品から切り取って論じるものが多い所以もここにあると思われる。しかし、やはり構造の視点でみる

と、これはストーリーの枠組を逸脱している特徴である。

補足すると、「その日」に入るまでの導入である「その頃」の不特定時間があるだけではなく、いったん特定の日の叙述が始まった後も、「私」の感性が領略する光と闇の対照が醸しだした「果物屋」の不思議な魅力が紹介されるなど、再び「その頃」が挿入されている。それは結果的に話の進行がとめられたと同じである。「丸善」を舞台にした心のドラマになくてはならない雰囲気作りではあるにしても、何か起きるだろうというストーリーへの期待があるとすれば、ことごとく外れる結果になるような時間の流れではなからうか。

ここでは novel や roman のように長編・中篇はもちろん論外で、いわゆる short story である短編かどうかを問題にしているのである。が、長さはどうであれ、小説は事件・人物・場面の要素を備え、一定の筋を展開させる。筋はたいてい時間的順序や一定の因果関係によって連結していくあるまとまった構成である。たとえ 20 枚以下のショート・ショートでもバーファーストによると「短編に必須なあらゆる技術と完璧な手腕、凝縮と抑制を要し」⁽⁴¹³⁾、プロット、アイディア、意外な結末が必須だという。こうしたことと照らし合わせると「檸檬」は構成が明快で意表をつく結末を持っている点などを考えると、ストーリー性を有しているが、多くの必要な要素が欠けていて、特に幅のある時間の流れに具体的な事件がないということから、小説と呼びにくいこともたしかである。

4. ストーリー／プロース

いうまでもなく、小説の分類の基準は多くあり、表現の方法から分けると、心理小説や書簡体小説、私小説または心境小説が挙げられよう。プロットを完全に排除した「ユリシーズ」のような意識の流れを書くジャンルもある。プロットらしいものがなければ、一概にストーリーではないと断定できない。大きな問題であるため、詳細に分析することを別の機会にするが、ここでいえるのは「檸檬」の表現はそういった「心理小説」よりも私小説や心境小説の問題に親近性がある。しかし、こ

の親近性もかなり限定的であり、親近性がありながら、私小説と大きく違う点に作家梶井の独自性があるとわたしは考える。ここで、小説と随筆の中間に位置するジャンル「散文」―「プロース」が浮かび上がる。

小説と随筆の中間に位置する分類が日本語に適切な用語が見当たらないため、とりあえず「散文」―「プロース」を使っている。従って、この二つの単語は非常に独自の使い方である。「散文」は古くから中国の文献にあったが、西周が『百学連環』(明治4年)で「Prose」の訳語として新しく登場させた語⁽⁴¹⁴⁾とされている。「散文」も「Prose」も、もともと散漫で制限を受けない飾り気のない言い方の意味合いがあり、文学用語としては、韻文(詩)の反対の概念である。つまり、韻律のある詩の分野以外の文学形式を網羅し、小説も散文詩も含め、散文で書かれた文芸作品の総称となるのは周知のとおりである。ところで、散文の中で小説以外のジャンルにエッセー、随筆があるが、小説の物語性とエッセーの叙情性を重ね合わせた形態のものをいう意味で、現代中国語圏では「散文」という分類が存在する。もちろん、総称の「散文」の下に位置するものである。本稿のねらいは、決して梶井基次郎の作品をそれに当てはめようとするのではない。あくまでも便宜的なこの語彙をとおして、「檸檬」がストーリーの完成を意図しながら、その枠からずれている表現を形容したい。

一方、叙情に重きを置く伝統は明治後半から正岡子規らが提唱した「写生文」にさかのぼることができる。「写生文」のありのままの模写を土台にしつつ、「静的描写を越えた主観の燃焼による感覚描写が特色」⁽⁴¹⁵⁾という伝統は大正の時期に流行した小品文、のち随筆と名がかわったものに受け継がれていった。これらは梶井基次郎の生きていた文学土壌の一面であるに違いない。これと相まって、私小説、中でも志賀直哉を頂点とするタイプの短い心境小説も、梶井の創作理念をみるうえで関連性があるが、梶井基次郎はどちらもそのまま採らなかった、あるいはどちらからも取り入れたと考える。

鈴木貞美氏が指摘したように、梶井の多くの作

品は語り手の外貌や身分など個人的データも書かない随想風の「心境小説」の形をとるが、「語り手の存在のあり方を象徴するものとして提示する方向を志向する」^(注16) 強固な意志があるという意味で、似ても似つかないのである。ただ、「檸檬」の小説らしくない点があまり重視されなかったこととの関連でいえば、私小説や心境小説は方法の問題とみられてこなかったわけではないが、独特の題材だから、これにあった表現法は物語性の薄い展開でも不思議ではないという暗黙の了解と関係する。いままで、私小説の狭い世界がよく批判されるが、表現方法への批判は少なかったように思える。

バックグラウンド抜きに「檸檬」を読んだ場合でも、いわゆる「ストーリー」と「プロース」の間の揺れ(または調和)が認められることは述べてきたとおりである。テキストの作者側の事情を取り払う前提の下と、またそれを持ち込んで読まざるをえないのが、研究のジレンマであるが、作者と作品史の観点から検討すると、やや乱暴なまとめ方であえていえば、この問題をめぐる極めて時代に左右されながらも、時代に与えられた創作の枠組にはまらない作家の創作の理想、挫折と積極的な妥協がみえる。これには、習作からの経緯や梶井基次郎の意識の二重化の表現意欲^(注17)を詳しく分析しなければならず、稿を改めたい。

注：

- 1) 初出『青空』創刊号(大正15年1月)、短編集『檸檬』(武蔵野書院、昭和6年5月)所収。なお、鈴木貞美氏によると、巻頭を飾ったのは雑誌の創刊への尽力で、作品への評価によるものでないという。
- 2) 林淑美「現象学の近代——梶井基次郎の場合」(『日本近代文学』平成6年10月 p1~p15)での記述による。
- 3) その例として、拙稿「影の成立と意味——ひとつの「泥

滓」論として」(『論樹』平成3年9月)と「梶井基次郎「冬の日」について」(同平成5年9月)がある。前者は河合隼雄『影の現象学』、後者は木村敏『時間と自己』ほかを手がかりに作品を論じた。

- 4) 同時代から戦後まで梶井基次郎について発言した作家は多彩である。鈴木貞美氏『梶井基次郎 表現する魂』(新潮社 平成8年3月)でもその影響度を高く位置付けている。
 - 5) 例えば、中国語圏文学では、レトリックでの韻文と散文の分類のほかにも散文と呼ぶ概念がある。詩歌・戯曲・小説以外の、雑文・随筆とも区別する文学作品を指す。
 - 6) 『文芸用語の基礎知識』(至文堂 昭和63年11月)「小説」欄を参照した。
 - 7) 鈴木登美氏の私小説論は「Narrating the self-Fictions of Japanese Modernity」(Stanford University Press, 1996)に詳しいが、引用は邦訳『語られた自己—日本近代の私小説言説』「序論 日本近代を語る私小説言説」(岩波書店 平成12年1月、大内和子・雲和子訳)を参照。
 - 8) 注7に同じ。
 - 9) ここでの引用は《座談会》「私がつたり」の言説について(『文学』平成8年)の鈴木氏の発言から。
 - 10) 鷲只雄「作品を読む『檸檬』」(『国文学 解釈と鑑賞』平成11年6月 P59)
 - 11) 拙稿「梶井基次郎習作以前の研究」(『論樹』12号 平成11年3月 P15~P26)を参照されたい。
 - 12) 拙稿「梶井基次郎『Kの昇天——或いはKの溺死』論」(『都大論究』36号 平成11年6月 P41~P52)を参照されたい。
 - 13) 注6に同じ。
 - 14) 注6前掲書「散文」欄による。
 - 15) 注6前掲書「写生文」欄による。
 - 16) 鈴木貞美「梶井基次郎の要所」(『国文学 解釈と鑑賞』平成11年6月 P17)参照
 - 17) 拙稿「梶井基次郎習作の研究」(『論樹』13号 平成11年12月 P29~P36)を参照されたい。
- [付記] 作品の引用は『梶井基次郎全集 第一巻』(筑摩書房 平成1年5月発行)に拠った。旧字体は新字体に改めた。